

連載

鉄道写真家 櫻井 寛

列車で行こう!

Let's go by train!

Railway-Photographer Kan Sakurai



第3回「ユングフラウ鉄道」で行こう!



ス イス・アルプスの中でも、とりわけ人気の高いユングフラウへの旅はインターラーケン・オスト駅からスタートする。第一走者はBOB(ベルナーオーバーラント鉄道)。軌間1mの狭軌鉄道だが編成は14両と長い。しばらく走ると列車は渓谷に分け入り、リュッチーネン川に寄り添う。白濁した流れが氷河の雪解け水であることを物語っている。ツヴァイリュッチーネン駅で列車は、グリンデルワルト行きと、ラウターブルンネン行きとに7両ずつに分割される。一瞬不安になるが心配無用。ユングフラウヨッホを目指すのなら、どちら行きに乗っても最終的にはユングフラウ鉄道の起点クライネ・シャイデック駅には同時刻に到着するダイヤだ。グリンデルワルト駅にてBOBからWAB(ヴェンゲルンアルプ鉄道)に乗り換えると目前に迫りくるのが世界三大北壁で名高いアイガー(3,970m)である。ほぼ垂直に屹立する岩壁は何者をも奇

せ付けぬ迫りに満ちている。WABの登山電車を降りると、いよいよトップ・オブ・ヨーロッパへの最終ランナー、JB(ユングフラウ鉄道)の登場だ。新田次郎がこよなく愛したクライネ・シャイデックから赤い登山電車に乗り込み、進行方向右側の窓に陣取ってユングフラウ山(4,158m)を仰ぐ。その稜線にドーム型の建物が見える。その建物こそ、標高3,454mに位置するユングフラウヨッホ駅だ。あれほどの高所まで、よくぞ鉄道を敷設したものだと感じる。「そこに山があるから鉄道を建設する」という、スイス人の登山鉄道にける熱き心がひしひしと伝わってくるユングフラウ鉄道なのだ。ユングフラウ観光でお薦めの宿は「インターラーケンユースホテル」で決まり!場所はユングフラウ観光の玄関駅インターラーケン・オスト駅から徒歩1分!超便利かつクリーンでモダンなユースホテルである。



鉄道写真家 櫻井 寛

1954年長野県生まれ。鉄道員を目指し昭和鉄道高校に入学したが、在学中に鉄道写真の魅力にとりつかれ写真家に転向、日本大学芸術学部写真学科卒。出版社写真部に15年間勤務。90年にフォトジャーナリストとして独立し、今日に至る。93年、航空機を使わず陸路・海路のみで88日間世界一周。94年『鉄道世界夢紀行』で交通図書賞受賞。旅した国は95カ国、渡航回数は250回超。写真集『列車で行こう! The Railway World』(世界文化社刊)など著書多数。日本写真家協会、日本旅行作家協会会員。東京交通短期大学客員教授。



日本ユースホステル協会は日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟 (Hostelling International) や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

こどもはおとなに。
おとなはこどもに、
なれる場所。



Hostelling Magazine vol.39



Cover Interview
コウケンテツ
世界中の食卓を
旅した先にあったもの

P.02



Youth Hostel Pick up
南飛騨
赤かぶユースホステル
まじめに、がんこに、40年
何度も訪れたい南飛騨古民家の宿

P.08



Hostelling Magazine
× 地球の歩き方
遺跡を回り歴史を学ぶ
エジプト古代への旅

P.12



鉄道写真家 櫻井 寛
「列車で行こう!」

P.16



松島むうの
晴れときどき旅びより

P.18



YH-GUIDE
ユースホステルガイド
長野県 / 岐阜県 / 愛知県
三重県 / 滋賀県 / 京都府
大阪府 / 兵庫県 / 奈良県

P.20



Hostelling Magazine vol.39
まとめてダウンロード

※本誌の情報は 2024年12月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。

発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会 編集・発行人 寺島 真

TEL (03)5738-0546 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1国立オリンピック記念青少年総合センター内

※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。